

# んめがったから成功

特集 秘伝豆

大地を両足でつかむような立ち姿。真っ黒に灼けた肌。アロハシャツから覗く胸元はうっすらと肋骨が浮き出ている。ただそこに立っただけで、全身から農家である誇りが溢れ出ている。言葉数は減法少ない。初めて彼を訪問した時、聞きたいことにたどり着くのに4~5時間かかった。大勢の集まりではいつも静かに笑っている。そんな彼が職舌になるのが太陽の下だ。自分の畑の前にすると流れるように言葉が出てくる。細胞一つひとつが農家なのだ、そう思われる。

## 一生懸命働き、遊ぶ

今回の主役は、山形県庄内町で米と枝豆、大豆を育てる農家、大友真樹さん（41）。平坦でまっすぐな道路の両側には見渡す限り

黄金の田んぼが広がり、遠くに青い山の稜線が見える。大友さんの家はこの地で江戸時代から続く農家だ。立派な家の玄関に掛かった「大友惣兵衛」という屋号からも、その歴史が伺える。根っからの農家というオーラがあるが、実は専業で農業を始めたのはたった5年前にすぎない。

16歳の夏、大友さんは高校を辞めた。学校が嫌だったわけではない。とにかく早く働きたかったのだ。「親父が一生懸命働いて一生懸命遊ぶ人で、俺も早くそうなりたかった」。父・誠二（せいじ）さんは、11月に米の仕事が終わると、田んぼの準備が始まる3月まで、ほとんど毎日スキーに出かけた。インストラクターの資格を持つほどの腕前で、山形県内にとどまらず、宮城、岩手、

遠くは長野にまで足を運んだ。そんな父の背中に憧れて学校を飛び出した大友少年の仕事人生は東京で、住み込みの新聞配達から始まる。

## 働けど働けど

毎朝3時から自転車で300軒ほどに新聞を配った。当時の給料は手取りで15万円。住み込みなので家賃もかからず、16歳の収入としては悪くはなかったが、「何やってたのかな、東京で。フラフラ遊んでた」と、一生懸命遊ぶ父のように遊んでいなかった。3年半の東京生活を終え、帰郷。その後は、地元の自動車整備工場や鉄工所に勤めた。31歳、同級生が開業した会社で自動車整備士として働き始める。しかし、2003

年のイラク戦争に端を発した原油高と2008年のリーマンショックの煽りを受け、経営はあっという間に窮地に陥った。

月160時間の残業に加え、3年目には給料が未払いとなった。田植え、稲刈りなどの繁忙期には父の手伝いもしていたため、全く休みなしの日々が続く。心身ともに追い詰められ、毎月借金をしながら生活していた。「頑張ればいいことあるはずだと思ってた。（給料が入らないことが）おかしいことだって気づかなかった」。様々なところからお金を借り、いよいよ貸してくれるところがなくなった。そこで初めて、なんとかならないのかと社長に訴えたが、「従業員なんてそれぐらいが普通だろ」と返され、ようやく目が覚めた。2013年、5年間

の忍耐の末に会社を辞め、労働監督署に相談に行くと、タイムカードなど就業時間の証明ができるものが必要だと言われる。もちろんそんなものはなかったが、ママな大友さんは毎日作業日誌をつけていた。それが証拠となり、未払いの給料の一部を取り戻すことができた。

## 一人の農家との出会い

その後、地域の農作業の手伝いやタクシー代行のバイトを始める。給料日に給料が入ってくるというごく当たり前のことが嬉しく仕方がなかった。そんなある日、大友さんの人生を変え人に出会う。山形県高島町の農家・中川吉右衛門（きちえもん）さん（42）だ（小誌2017年10月号で特集）。

吉右衛門さんが主催する、肥料・農薬を使わずに作物を育てる栽培方法「自然栽培」の講習会に参加したのだ。大友さんはそこで吉右衛門さんが育てた人参の葉っぱとササニシキのおにぎりを食べて衝撃を受ける。「え！？って思った。人参の葉っぱは香りが良くて、コメは3年前のものなのに“んめ(おいしい)”がった」。それ以来、大友さんは吉右衛門さんの自然栽培と、その農業に対する考え方に深く共鳴するようになる。今でも車で片道2時間半をかけて、月に3、4回は彼の元を訪ねる。「俺は吉右衛門さんの舎弟だと思ってるけど、吉右衛門さんは“同志”だって言ってくれる」と顔をほころばせる。支え合い、学び合う二人の農家の絆がある。

## 自然栽培の挑戦

自分でもこんな“んめ”食べものをつくりたいと、父に自然栽培で枝豆を作らせてくれと頼むが、「そんな怖えもんだめだ」と一蹴される。一般的には、収量を増やすために肥料を使い、雑草や病気を防ぐために農薬を使うので、それらを使わずに栽培するとどうなるのか父には想像すらつかなかったのだ。「だめだ。口で説明できね、見せねばね」と、同じ部落のおお赤ちゃんから借りた5畝（0.5反）の小さな畑で挑戦を始めた。大友さんの挑戦1年目、結果は収量十分、そして何より味が良かった。当時3歳だった姪っ子が肥料を使った父の枝豆よりも大友さんの枝豆の方が美味しいと言ったことが決め手になり、父を納得させることができた。



【山形県庄内町本小野方】

文=成影 沙紀、高橋 博之 写真=玉利 康延

# 9

月7日

21°C

